

今宵は切なく  
鳴いてはならぬ



切傷甲作

沖村まどかの日課は、毎夜の自慰行為であった。

彼女がまたがるお気に入りのベッドボードの飾りには愛液が丹念に塗り込まれ、すっかりいやらしい匂いが染みついている。今宵もまどかはネグリジェの裾を咥え、声押し殺しながら一心不乱に腰を振っていた。

充血した乙女の陰核が、薄手のパンティ越しに刺激を与えられる。男を知らない肉壺から涎が溢れ、桃色の唇を潤わせパンティを湿らせていく。

(犯して……誰か私を、いやらしい私を犯して……♡)

か弱い自分が乱暴に犯される様を想像してまどかはより一層興奮し、快感に夢中になった。

妄想の中で、彼女は激しく犯されている。大きな胸がさらに大きな手で揉みしだかれ、丸い尻を何度も男の下腹部が打ち付けた。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「あんっ♡ あんっ♡ いやんっ♡ だめっ♡  
中だけはっ♡ 中出しだけは許してっ♡」

強姦者はまどかの懇願を無視して、汚らしい粘液を彼女の胎内に注ぐ。ねっとり広がる熱は彼女の子宮を、腰を、脊髄を、そして頭を、じんわり溶かしていった。

「イクうっ……♡ イっくううう……♡♡♡」

汗だくの身体がブルブル震える。鼻息は荒く吹かれ、裾を噛み締める口から切なげに小さな声が漏れる。乙女を中毒にさせる快感が、まどかの全身を波打たせていた。

その時だった。寮のスピーカーから男性教師の荒々しい声が響いた。抜き打ちの自慰行為検査が行われる合図であった。よりにもってそれは、まどかの寮部屋が対象となっている。

まどかは余韻を味わう暇もなく、急いで部屋から出た……。

「部屋番号214から  
217までの生徒！」

「今すぐ部屋から出て  
廊下に並びなさい！」

「これより  
抜き打ちの  
自慰行為  
検査をする！」

「着衣はそのまま  
5秒以内に  
出て来い！」

「……ど  
うしよ……」

ハハ

「良いか  
お前達！」  
「学生の本分は  
学ぶ事にある！」

「自慰行為にふけて  
その事を疎かにするなど  
言語道断だ！」  
五ヶ条

一、自慰行為を  
禁ず。

「まさか、純潔な生徒を  
股間をいじくり回して、  
下着を汚している者など  
居るわけ無いよな？」

「……」

くっ……♡

「隠しても無駄だ  
三オイで分かる  
からな……！」



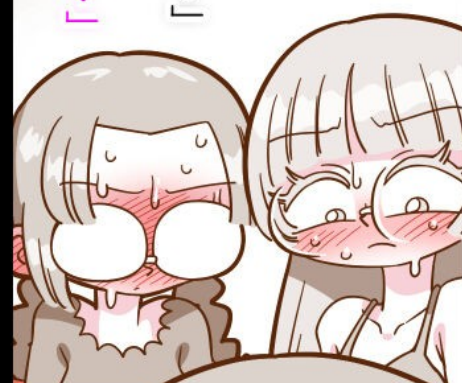
「まあ 誰か  
検査をする  
かなあ？」

「パンティを  
又レ又レに  
してそうな  
奴は……！」



「お前か？  
それとも  
お前か？」

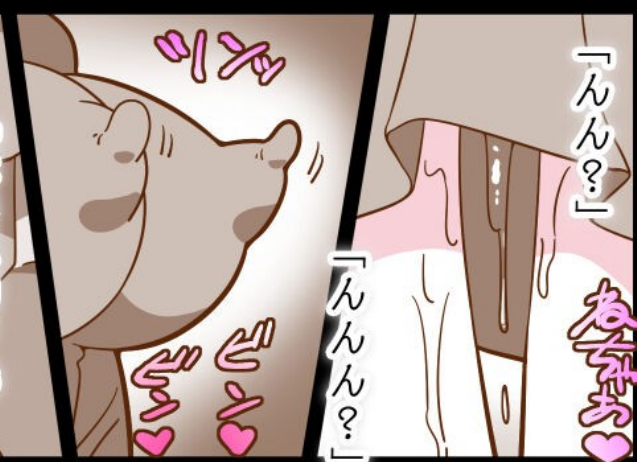
「ん……？」



「んん？」

「んんん？」

お前か♡



「なにが匂うぞ  
沖村まどか！  
欲情し方女の  
フエロモンが  
プンプン匂うぞ」

「！！」



「だ だから  
止めとけうて  
言っ方のよ！」



「うう……  
ガマンでき  
ないん  
だもん……」

「なんだコレは？  
繊維にジットリ  
いやらしい汁が  
染み込んでる  
じゃないか」

ぬま



「あうう……」

「内緒話なんか  
してないで 早く  
パンティを脱げ！！」



するる

「こうなっ方ド  
マンコも直接  
検査するぞ！」

「パジャマを  
充くし上げて  
股を開け！」

「は……は……  
はい……」

「あうう……」

「馬鹿者!!  
こうやって胸まで  
全部上げんか!!」

「!?!」

「力を抜け!  
触診検査だ！」

「あっ!!  
ゆびっ!!  
ゆびっ!!」

0000

「あうう……」

「どハッ!!」

「あぁっ！  
せせ先生っ！  
だめえっ！」

「パンティの奥まで  
マンコの奥まで  
ねっとり又メッて  
いるじゃねえか」

「ち  
ち 違うんですっ！  
オリモノで……っ」

「それにしちゃう敏感に  
なってるみたいだぞ？  
気持ちよマそうに  
腰を跳ねマせやがって」

びんぎんぎん

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡  
ちゅっ♡  
ちゅっ♡

「あぁんっ！  
先生だめえっ！」

「し  
破けちゃうっ！」  
処女膜

「口では嫌がっても  
乳首はこんなに  
嬉しがってるぞ？」

「あぁんっ いやんっ！  
は 激しくしないで  
下さいっ……っ！」

びんぎんぎん

びんぎんぎん

ちゅっ♡  
ちゅっ♡  
ちゅっ♡

「これが本当に  
オリモノだって?」

「どう見ても  
エロマンコ汁じゃ  
ねえか……?」

「はあ……」

「はあ……」

「せ……」

「せんせ……」

「ご……ごめん  
なさい……」

「皆が明日の予習の  
為に勉強している時に  
お前はオナニーを  
していいんだ!」

「言い逃れは  
出来んぞ!」

ネトネト

おまおま



「う……うう……  
ゆる……許して  
下さい……!」

「謝るなら  
皆にしろうが!」

「あ……!」



「ご……ごめんなさい……  
皆が勉強してるのに……!」

「オナニーなんかして  
ごめんなさい……!」

「声が小さい!!」

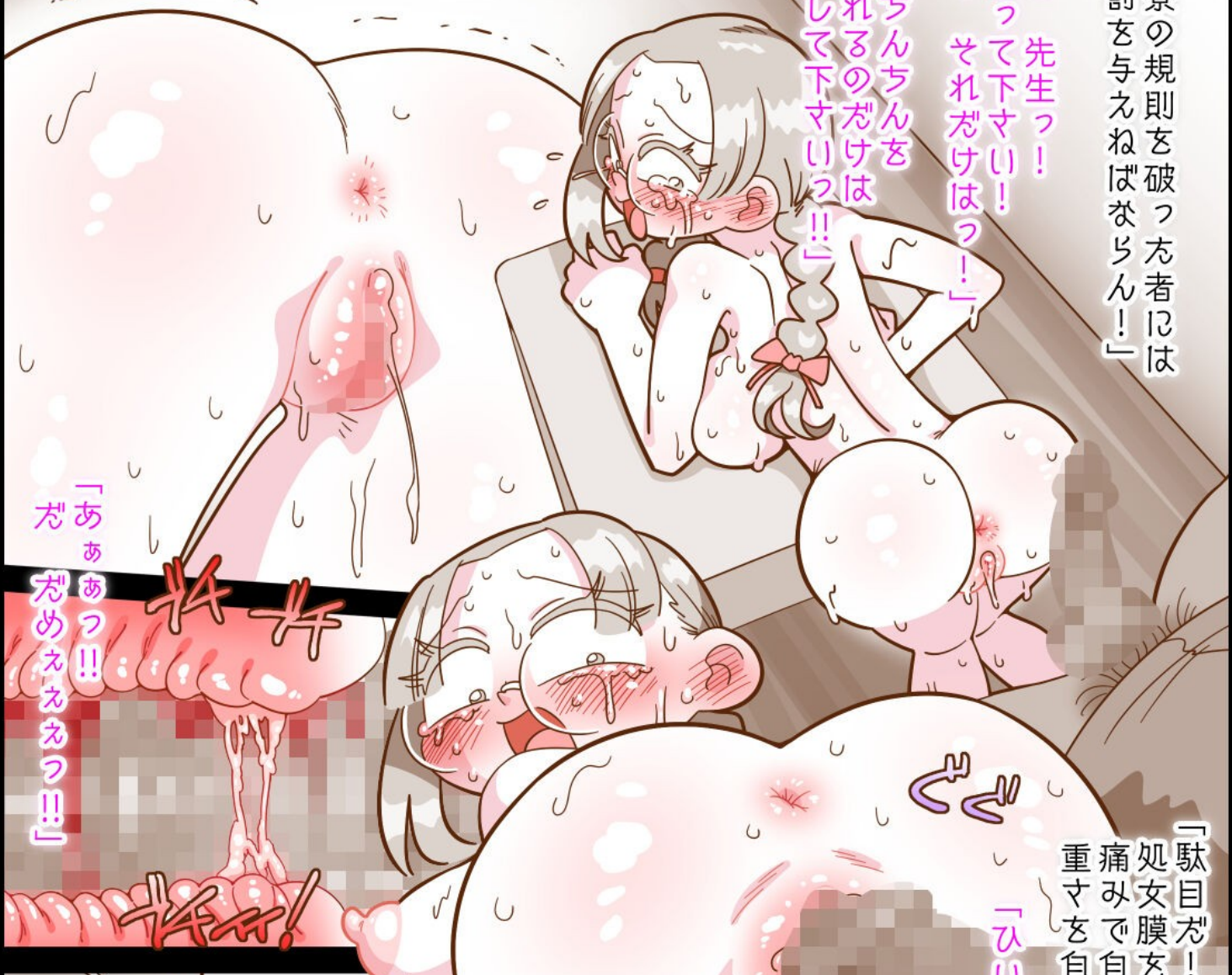
「オナニー  
して  
ごめん  
なさい!!」



「寮の規則を破った者には罰を与えねばならん！」

「せ 先生っ！  
待って下さい！  
それだけはっ！」

「おちんちんを  
入れるのだけは  
許して下さいっ!!」



「あああつ!!  
だめえええつ!!」

「駄目だ!  
処女膜を破られる  
痛みで自分の罪の  
重さを自覚しろ!!」

「ひいひいっ!!」

「あっ  
おごっ!!」



「俺のペニスで……  
処女喪失しろ!!」



「んざいひいっ!!」

「うう……  
あぐ……」

「サチュン!!」

「あつ……  
あつ……」

ニギニギ  
ニギニギ

「そ  
さんなつ  
わさん  
わちし  
の……  
はし  
めて……」

ぬ  
い  
3P  
……

「勉強を疎かに  
する者は  
こうなるんだ！  
お前も良く  
見ておけ！」

「あ  
あ  
あ……」

「どれだけ丹念に  
マンズリかいて  
やがっちゃんだ？」  
「すっかり膣が  
ほぐれて  
チンポに  
絡みついて  
くるぞ！」

「あぐっ  
うぐっ  
やぐっ  
やめ  
てえ……」

ず  
い  
ん  
ぬ  
い  
ん  
ぬ  
い  
ん

ぐん

ぐん

「念願のセックスだぞ?」

「もっと喜べ!」

「うううっ先生止めてえ……!」

ぬるるん!

「駄目だ!他の者へも見せしめでもある!」

「お前が犯されてる惨めな姿をちゃんとして見てもらうんだ!!」

あは!!

「きゃあっ!!」

「ひいっひいっ!!」

「ちゃんと勉強しないと男に股を差し出すまきや生きていけなくなるぞ!」  
「それが嫌なら勉強をしろ!!」

「勉強出来ない女は大人しく孕んでろ!!」

「いやっ!!いやっ!!だめ先生!」

ぬるるん!

あは!!

ぬるるん!

ぬるるん!

ぬるるん!

あは!!

あは!!

「中に出しちゃっつ……ダメえええつ!!」

「あっ あっ……そんなっ……」

「中……精液……赤ちゃん出来ちゃう……」

あははは!!

「勉強が出来ないから大人しくかき産んでろ!」  
「それしか能が無いんだからよ!!」

「あ あ 赤ちゃん……先生の赤ちゃん……」

あはは!!





「おらっ！  
ザーメンの味  
覚えろ！」

「むぐっ！  
ごぶうっ！」

「エロい事の  
勉強なり  
喜んで  
するぞろ!？」

「んふーっ！  
ぶふーっ！」

「もうオナニーなんか  
しなくて済むように  
毎日先生がレイプ  
してやるからな！」

「あうう……  
いやあ……」

「ち  
ちゃんど  
勉強します……  
許して下さい……」



あーっ  
あーっ  
あーっ  
あーっ  
あーっ  
あーっ

「あううっ!  
はうううっ!」

「許すわけっ!  
ねえぞろっ!  
性奴隷がよっ!」

「んーっ!  
うううっ!」

あーっ  
あーっ  
あーっ

「オナ狂い女に  
二度目のチャンス  
まんかねえんぞよ!」

はぁっ  
はぁっ  
はぁっ  
はぁっ  
はぁっ  
はぁっ

「反面教師として  
無様な姿を  
皆に見せつけろ!」

「おちん  
ちん……♡」

「いやらしい  
音……♡」

「あううっ!  
はううっ!  
はひいりんっ!」

「ちぬう……♡」

はぁっ  
はぁっ

はぁっ  
はぁっ

「はあ……♡  
はあ……♡」

「すげい……♡」

はぁっ  
はぁっ  
はぁっ  
はぁっ

ひんぱん



「ああああんっ♡♡♡♡♡  
ぐりぐりだめえっ♡♡♡♡♡」

「おかしくねえ奴が  
レイプで感じるかよ!」



「先生っ!  
ダメですっ!」

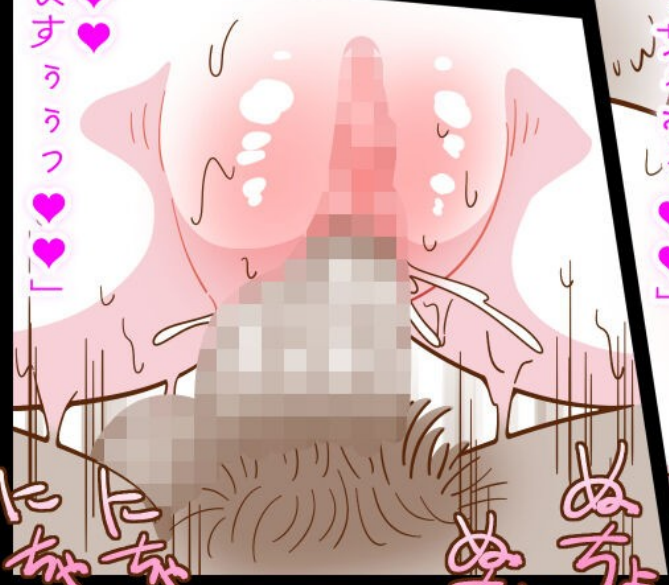
「私 おかしく  
なっちゃうっ!」

もみもみ  
ほん!ほん!



「許して欲しけりやなあ!  
子宮でザーメン飲んで  
受精しやがれ!」

「はははっ♡♡♡♡♡  
じゅせいしますうっ♡♡♡♡♡」



ぬちよぬちよ  
にゃにゃ

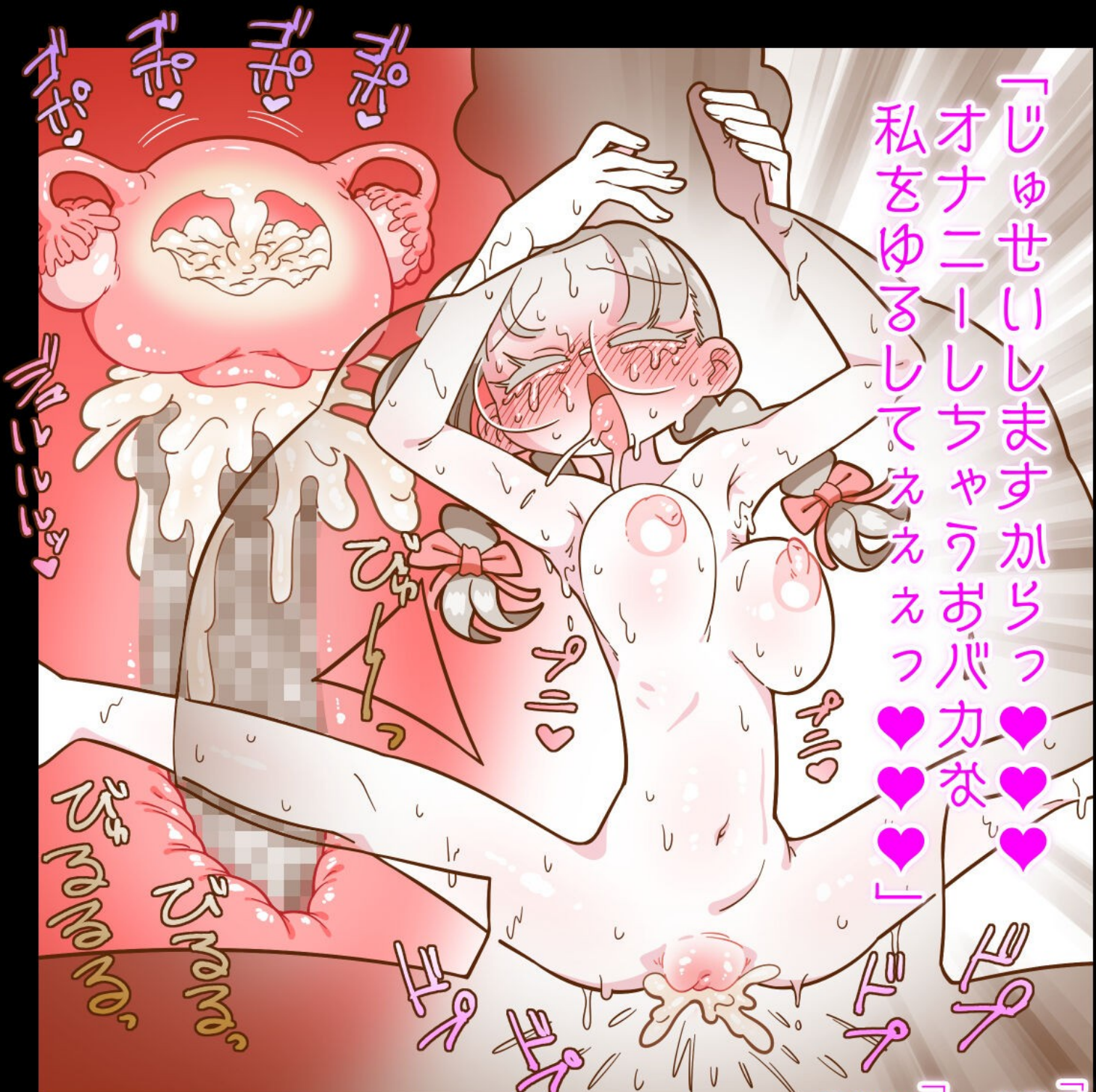


「お前の身体で  
ダメじゃない所が  
あるのかよ!」

「全身敏感にして  
孕み方がりやがって!」

「だめっ♡♡♡♡♡  
つねっ♡♡♡♡♡  
せつなく♡♡♡♡♡  
なっ♡♡♡♡♡  
ちゃうっ♡♡♡♡♡」

キッ♡  
キッ♡



「じゅせいしますか  
 オナニーしちゃうおバカな  
 私をゆるしてえええっ  
 ♡♡♡♡♡」

びしょ  
 びしょ

びしょ  
 びしょ  
 びしょ

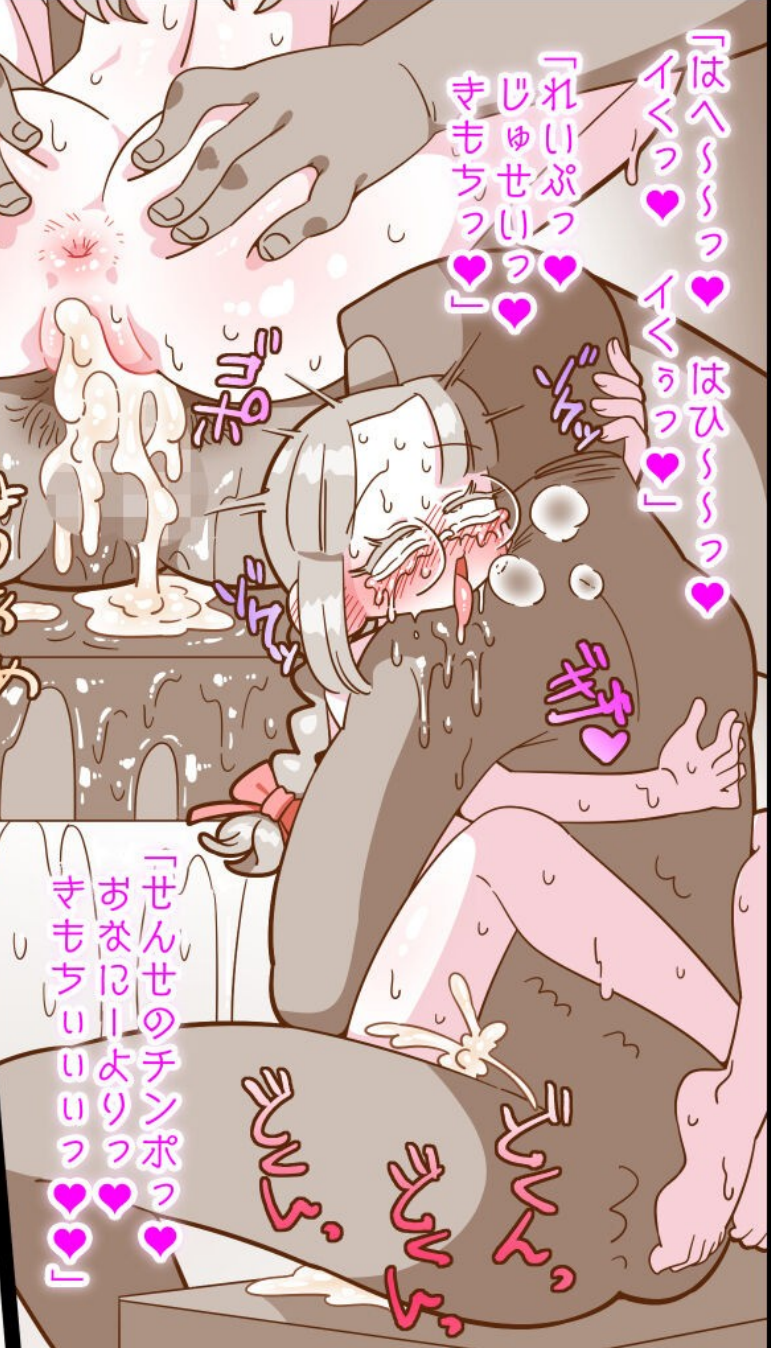
「るんるん♡  
 ちゃんの卵子！」  
 「子宮がポカポカ  
 で温かいから  
 ビクニククに  
 来ちゃっ充♡」



「って何 何!？」  
 「キヤ〜〜!  
 来ないで〜〜?！」  
 クラクラ



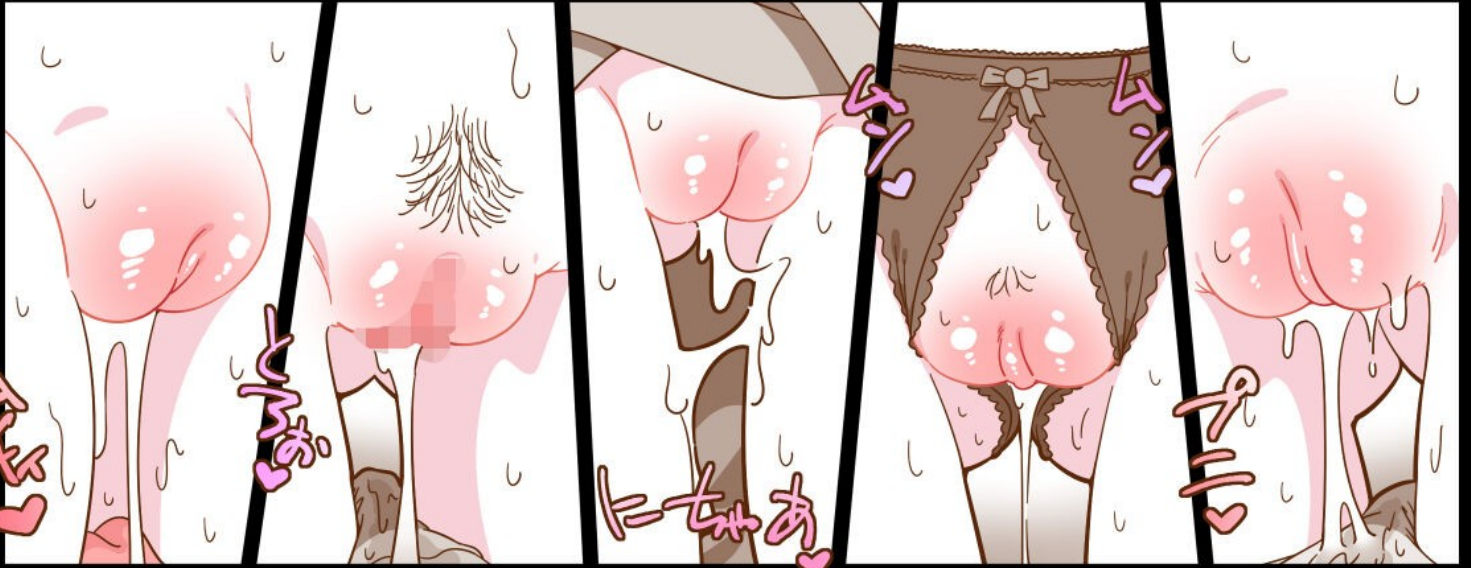
「むぐうう……」  
 「赤ちゃんに  
 なりゆう……」  
 ぶんぶん  
 ぶんぶん



「ん？ なんだ  
このニオイ……」

「お前達からモ  
オナニー馬鹿女の  
エロいニオイが  
漂って来るぞ」

「今すぐ全員  
パンティを  
下ろせ！」



「全く……！  
目の前で  
友達がレイプ  
され充つてのに」

「気を引き締める  
どころか発情  
しやがって！」

「そんな  
ふしぢらな  
生徒にも  
罰が必要  
ぢなあ！」

「服を脱いで  
一人ずつ先生の  
前に来い！  
犯してやる！」







「やっぱり女は  
チンポの事しか  
考えとらんのか！」

「罰として毎日  
レイプしに来るからな！  
夜になったらマンコ  
温めておけ！」

「おっぱい  
オナニーして  
レイプの準備  
します……♡」

「はい……♡  
先生……♡」

「はあ♡  
はあ♡」

今宵も、まどかはお気に入りのベッドボードの飾りにまたがって、自慰行為に耽っていた。いつもの様にネグリジェの裾で声を押し殺す事も無く、寮に響くような大きな声でいやらしく鳴いていた。

「ああんっ♡ あああんっ♡ セックすっ♡ セックすうっ♡  
おちんぽっ♡ 先生のおちんぽっ♡ 待ちきれ無いっ♡♡♡」

娼婦の様な恥知らずの嬌声は、一つだけでは無かった。

「したいっ♡ セックスしたいっ♡ 先生早く来てっ♡♡」  
「イクっ♡ もうイっちゃうっ♡ またイっちゃうっ♡♡」  
「おしおきしてっ♡ アタシ悪い子っ♡ 悪い子なのっ♡♡」

男性教師のペニスによって、美少女達は自慰行為では得られない刺激の虜になってしまった。またあの刺激を味わう為、寮では自慰行為禁止の規則が堂々と破られるようになり、毎夜の如く誰かがレイプされ、種汁を注がれ身悶えているのだった。

「お願い先生っ♡ 今夜は私を選んでっ♡ おまんこをたっぷり潤わせてますっ♡ 先生のおちんぽ様が気持ち良くなれるように、沢山ほぐして温めてますっ♡ お願いします先生っ♡ 今夜は私を犯して、沢山汚して下さいっ♡♡」

競うようにして行われる自慰合戦の最中、廊下にガサツな足音が響く。それがまどかの寮部屋に近づくにつれ、彼女の声は大きくなり、腰の動きは一層激しくなる。そして、まどかの部屋の扉は開かれた。

「先生っ♡♡♡」  
「よおまどか、サラも元気にオナニーしてるか？ 全くけしからん娘達だ。規則を破った罰として、今日も孕ませてやるからな」  
「はいっ♡♡♡ 先生っ♡♡♡」

寮部屋の友人と一緒に、まどかは汗と愛液が滴る身体を躍らせベッドの上に飛び乗ると、尻を突き出してペニスを懇願した。固い男根を根本まで飲み込もうと、美少女達の膣がパクパクと口を開き、だらしなく涎を垂らす。

淫らな快感をねだり、まどかは切なそうに鳴き続けた。

終  
わ  
り



今宵は切なく鳴いてはならぬ 終

著者 切傷甲

配信開始 2024年9月



■ ブログ

<https://ci-en.dlsite.com/creator/4699>

■ SNS

<https://twitter.com/kirikizu1>

■ ご意見・ご感想など

[https://odaibako.net/u/kirikizukoh\\_post](https://odaibako.net/u/kirikizukoh_post)

今宵は切なく  
鳴いてはならぬ



切傷甲作

沖村まどかの日課は、毎夜の自慰行為であった。

彼女がまたがるお気に入りのベッドボードの飾りには愛液が丹念に塗り込まれ、すっかりいやらしい匂いが染みついている。今宵もまどかはネグリジェの裾を咥え、声押し殺しながら一心不乱に腰を振っていた。

充血した乙女の陰核が、薄手のパンティ越しに刺激を与えられる。男を知らない肉壺から涎が溢れ、桃色の唇を潤わせパンティを湿らせていく。

(犯して……誰か私を、いやらしい私を犯して……♡)

か弱い自分が乱暴に犯される様を想像してまどかはより一層興奮し、快感に夢中になった。

妄想の中で、彼女は激しく犯されている。大きな胸がさらに大きな手で揉みしだかれ、丸い尻を何度も男の下腹部が打ち付けた。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「あんっ♡ あんっ♡ いやんっ♡ だめっ♡  
中だけはっ♡ 中出しだけは許してっ♡」

強姦者はまどかの懇願を無視して、汚らしい粘液を彼女の胎内に注ぐ。ねっとり広がる熱は彼女の子宮を、腰を、脊髄を、そして頭を、じんわり溶かしていった。

「イクうっ……♡ イっくううう……♡♡♡」

汗だくの身体がブルブル震える。鼻息は荒く吹かれ、裾を噛み締める口から切なげに小さな声が漏れる。乙女を中毒にさせる快感が、まどかの全身を波打たせていた。

その時だった。寮のスピーカーから男性教師の荒々しい声が響いた。抜き打ちの自慰行為検査が行われる合図であった。よりにもってそれは、まどかの寮部屋が対象となっている。

まどかは余韻を味わう暇もなく、急いで部屋から出た……。

「部屋番号214から  
217までの生徒！」

「今すぐ部屋から出て  
廊下に並びなさい！」

「これより  
抜き打ちの  
自慰行為  
検査をする！」

「着衣はそのまま  
5秒以内に  
出て来い！」

「……ど  
うしょ……」

ハハ

「良いか  
お前達！」  
「学生の本分は  
学ぶ事にある！」

「自慰行為にふけて  
その事を疎かにするなど  
言語道断だ！」  
五ヶ条

一、自慰行為を  
禁ず。

「まさか、純潔な生徒を  
股間をいじくり回して、  
下着を汚している者がど  
居るわけ無いよな？」

「……」

ハハ…♡

「隠しても無駄だ  
三オイで分かる  
からな……！」



「まあ 誰か  
検査をする  
かなあ？」

「パンティを  
又レ又レに  
してそうな  
奴は……！」



「お前か？  
それとモ  
お前か？」

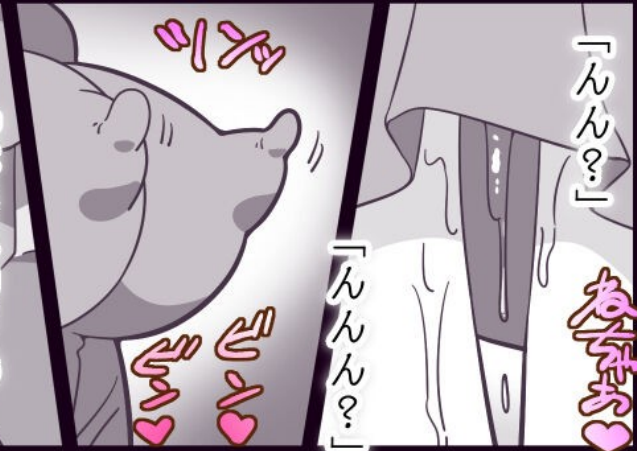
「ん……？」



「んん？」

おんんん

「んんん？」



「なにか匂うぞ  
沖村まどか！  
欲情し方女の  
フエロモンが  
アンプン匂うぞ」

「！！」

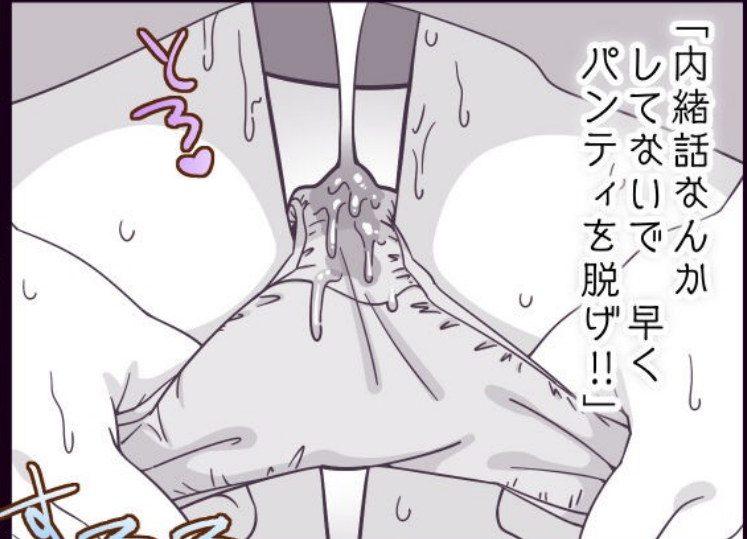


「だ だから  
止めとけって  
言っ方のよ！」



「うう……  
ガマンでき  
ないん  
だもん……！」

「内緒話なんか  
してないで 早く  
パンティを脱げ！！」



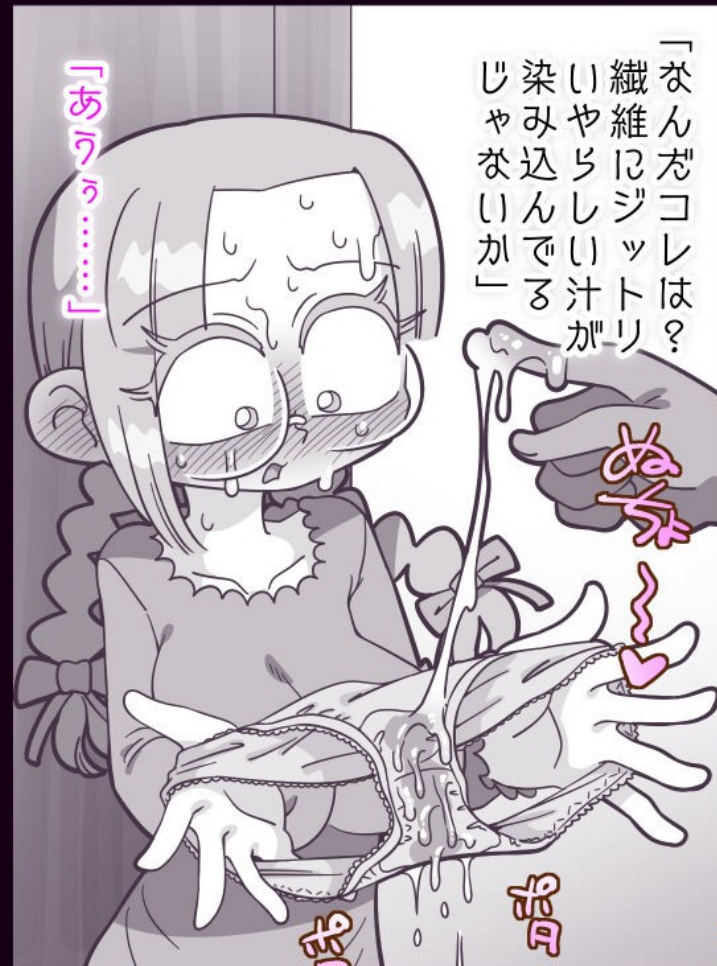
「なんだコレは？  
繊維にジットリ  
いやらしい汁が  
染み込んでる  
じゃないか」

ぬる

お

アロ

「あうう……！」



「こうなっ方ド  
マンコも直接  
検査するぞ！」

「パジャマを  
充くし上げて  
股を開け！」

「は……は……  
はい……」

「あうう……」

「馬鹿者!!  
こうやって胸まで  
全部上げんか!!」

「!?!」

「力を抜け!  
触診検査だ！」

「あっ!!  
ゆびっ!?!」

ビュッ!

たろ 000

たろ 000

たろ 000

「あぁっ！  
せ先生っ！  
だめえっ！」



「パンティの奥まで  
マンコの奥まで  
ねっとり又メッて  
いるじゃねえか」

「ち  
あ 違うんですっ！  
オリモノで……っ」



「それにしちゃう敏感に  
なってるみたいだぞ？  
気持ちよマサうに  
腰を跳ねマセヤがって」



「あぁんっ いやんっ！  
は 激しくしないで  
下さいっ……っ！」

「口では嫌がっても  
乳首はこんな  
嬉しがってるぞ？」



「あぁんっ！  
先生だめえっ！」

「し  
破けちゃうっ！」

「これが本当に  
オリモノだって?」

「どう見ても  
エロマンコ汁じゃ  
ねえか……?」

「はあ……」

「はあ……」

「せ……」

「せんせ……」

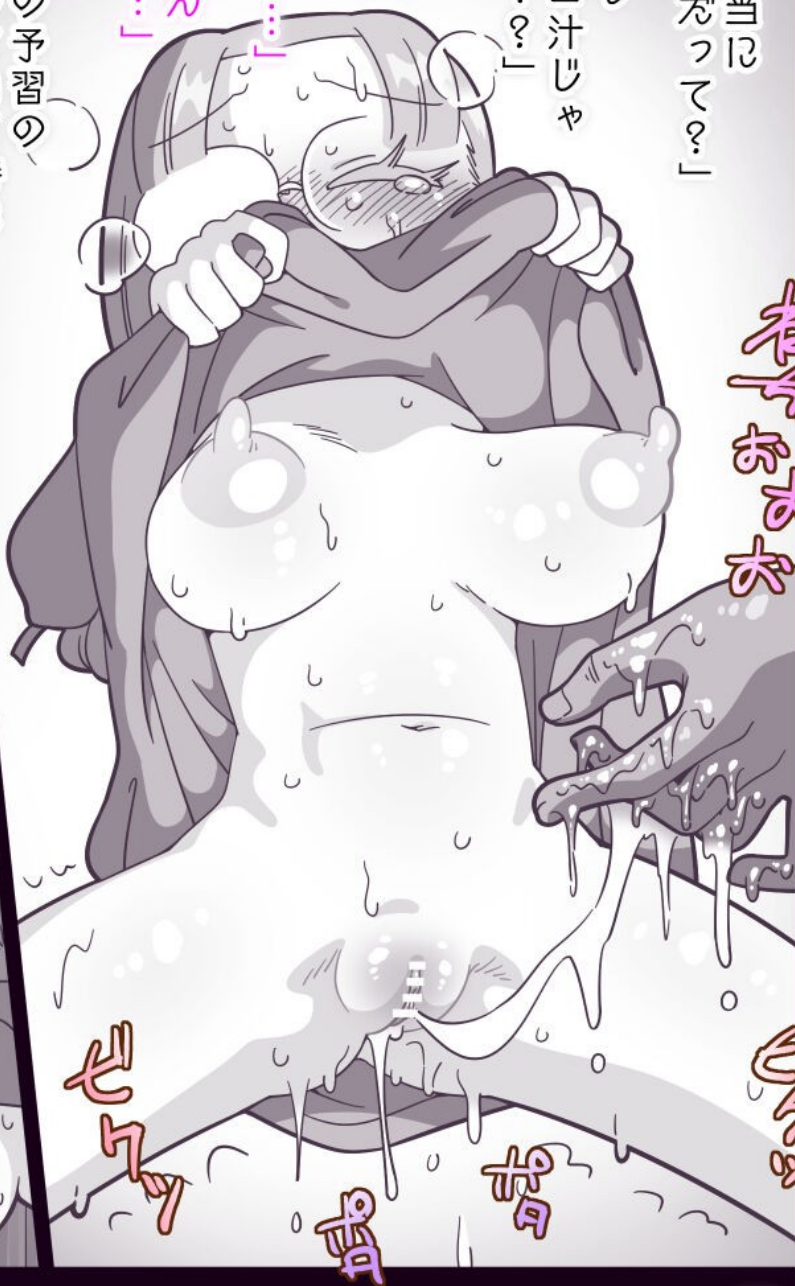
「ご……ごめん  
なさい……」

「皆が明日の予習の  
為に勉強している時に  
お前はオナニーを  
していいんだ!」

「言い逃れは  
出来んぞ!」

ネトネト

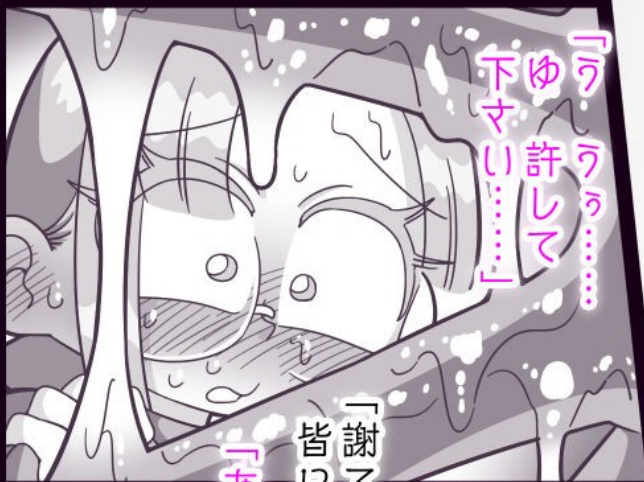
おまおま



「う……うう……  
ゆ……許して  
下さい……」

「謝るなら  
皆にだろうが!」

「あ……!」



「ご……ごめんなさい……  
皆が勉強してるのに……」

「オナニーなんかして  
ごめんなさい……!」

「声が小さい!!」

「オナニー  
して  
ごめん  
なさい!!」





「あつ……  
あつ……」

ミダ ミダ ミダ

「そ  
さんなっ  
わさん  
わちし  
の……  
はしめ  
て……」

ぬ  
ぽ  
……

「勉強を疎かに  
する者は  
こうなるんだ！  
お前も良く  
見ておけ！」

「あ  
あ  
あ……」

「どれだけ丹念に  
マンスリかいて  
やがっちゃんだ？」  
「すっかり膣が  
ほぐれて  
チンポに  
絡みついて  
るぞ！」

「あぐっ  
うぐっ  
やぐっ  
やめ  
てえ……」

ず  
ん  
ん  
ぬ  
ぽ  
ん

ゴ  
ン  
ゴ  
ン

ぐ  
ん

ぐ  
ん

「念願のセックスだぞ?」

「もっと喜べ!」

「うううっ先生止めてえ……!」

ぬるるん!

「駄目だ!他の者へ見せしめでもある!」

はっはっはっ

はっはっはっ

「お前が犯されてる惨めな姿をちゃんとして見てもらうんだ!!」

あは!!

「きゃあっ!!」

あはっはっはっ

「ひいっひいっひいっひいっ!!」

「ちゃんと勉強しないと男に股を差し出すまきや生きていけなくなるぞ!」  
「それが嫌なら勉強をしろ!!」

ぬるるん! はっはっはっ

「勉強出来ない女は大人しく孕んでろ!!」

「いやっ!! いやっ!! だめ先生!」

ぬるるん!

あはっはっはっ

あはっはっはっ



「何ボサつとしてんだ  
舐めて綺麗にしろ!!」

「はへっ  
いやんっ!?!  
ばっちいつ……!!」

「誰のせいで  
汚れたと  
思ってるんだ!!」

「むぐぷっ!!」

「おポ!!」

「歯を立てずに  
喉奥まで  
啜え込むんだよ!」

「んっっ!  
んむううっ!」

「ほほほ」

(嫌っ……!!  
先生のおちんちんの  
毛のニオイ……  
嗅がまれちゃうっ!!)

「おポ!!」

「ぶぶぶっ!  
じゅぶぶっ!」

「べろべろ  
舐め回して  
チンポ洗え!」

「売春婦  
み方で  
お似合い  
だぞ!」

「んぐぷうううっ!」

「おほ!!」

「おほ!!」

「おポ!!」

「おほ!!」

「おほ!!」



おっぱい  
おっぱい  
おっぱい

おっぱい  
おっぱい  
おっぱい

「オナ狂い女に  
二度目のチャンス  
まんかねえんぞよ！」

「許すわけっ！  
ねえぞろっ！  
性奴隷がよっ！」

「あううっ！  
はうううっ！」

おっぱい  
おっぱい  
おっぱい

「反面教師として  
無様な姿を  
皆に見せつけろ！」

「おちん  
ちん……♡」

「いやらしい  
音……♡」

「あううっ！  
はうううっ！  
はひいりんっ！」

「ちぬう……♡」

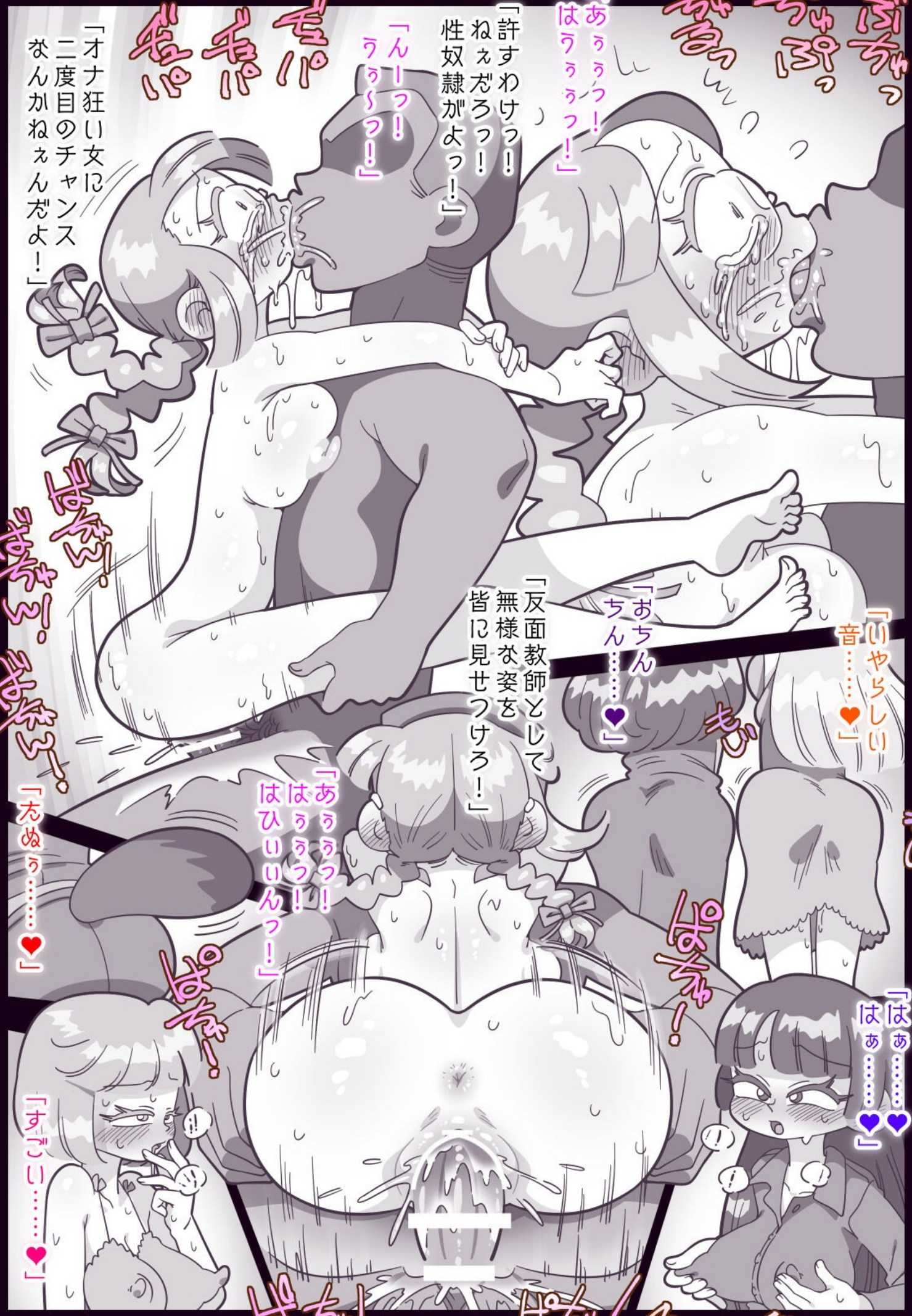
おっぱい  
おっぱい

おっぱい  
おっぱい

「はあ……♡  
はあ……♡」

「すげい……♡」

おっぱい  
おっぱい  
おっぱい



びびる



「ああああんっ♡♡♡♡♡  
ぐりぐりだめえっ♡♡♡♡♡」

「おかしくねえ奴が  
レイプで感じるかよ!」



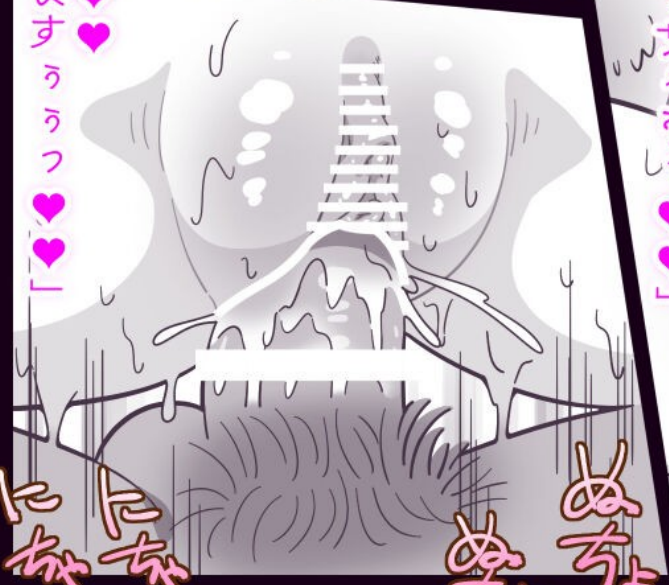
「先生っ!  
ダメですっ!」

「私 おかしく  
なっちゃうっ!」

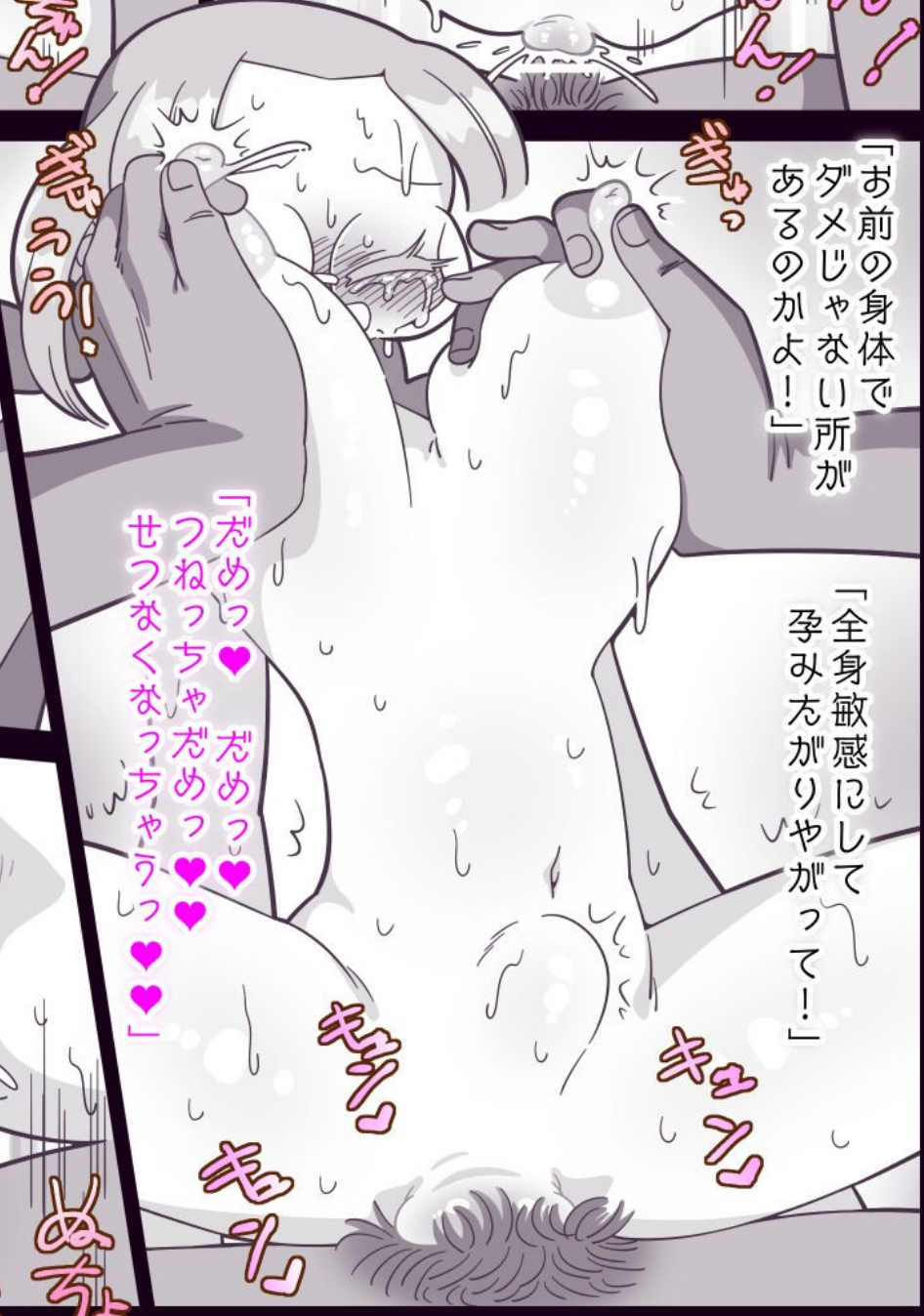


「許して欲しけりやなあ!  
子宮でザーメン飲んで  
受精しやがれ!」

「ははいつ♡♡♡♡♡  
じゅせいしますうっ♡♡♡♡♡」



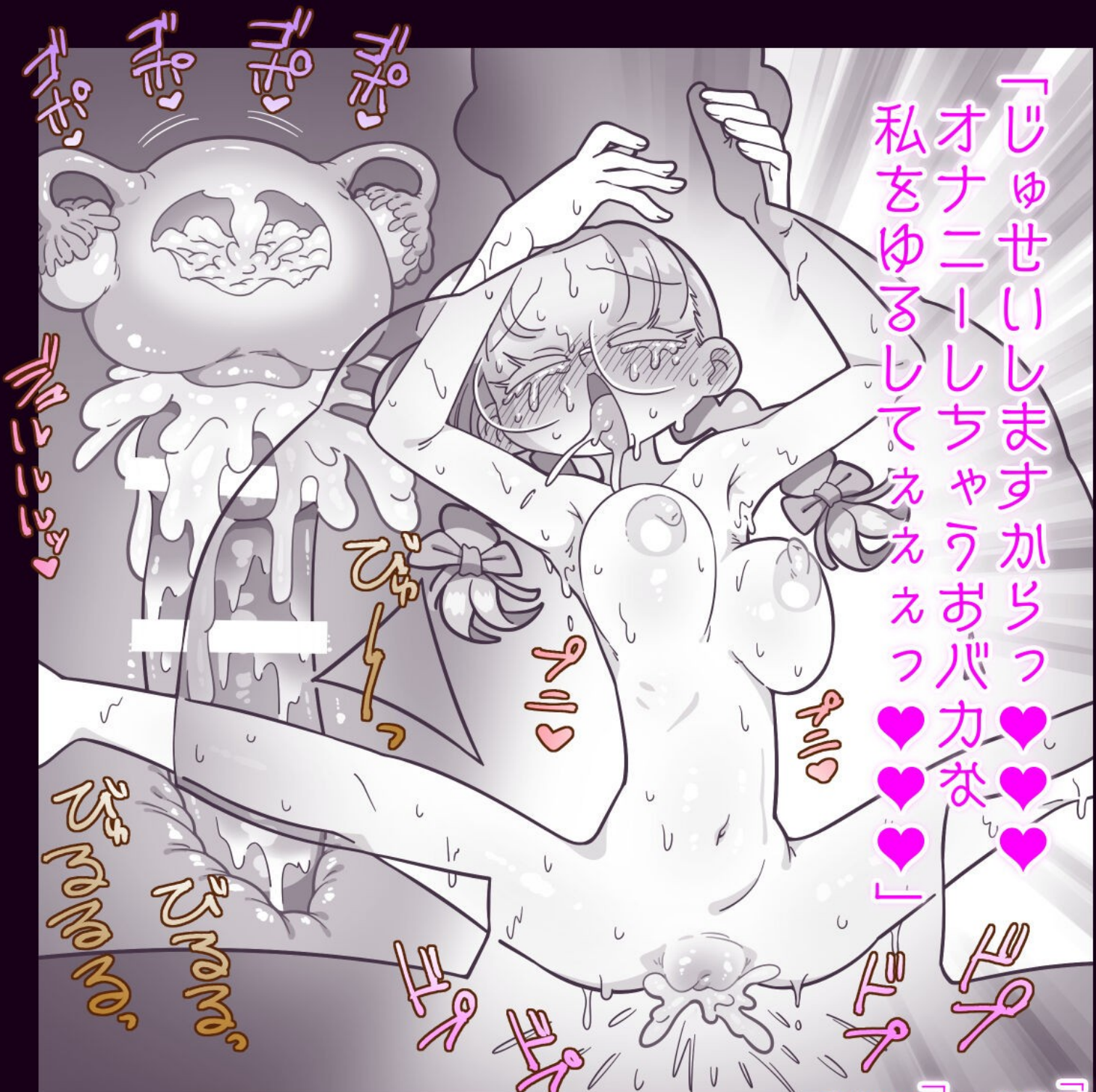
ぬちよ  
たか



「お前の身体で  
ダメじゃない所が  
あるのかよ!」

「全身敏感にして  
孕み方がりやがって!」

「だめっ♡♡♡♡♡  
つねっ♡♡♡♡♡  
せつなく♡♡♡♡♡  
なっ♡♡♡♡♡  
ちゃうっ♡♡♡♡♡」



「じゅせいししますか  
 オナニーしちゃうおバカな  
 私をゆるしてえええっ  
 ♡♡♡♡♡」



「赤ちゃんに  
 なりゆう……」

あほん!



「キヤッ! 来ないで……?」



「らんるん♡ 私まどかちゃんの卵子!」

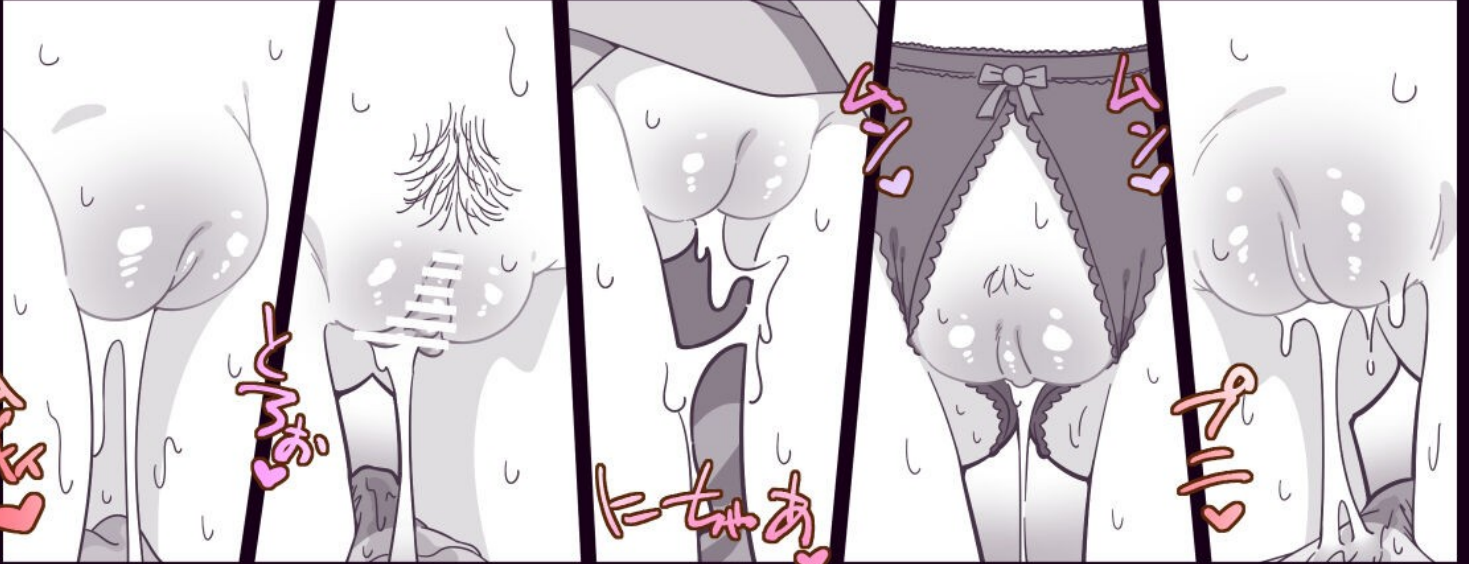
ふわ ふわ



「ん？ なんだ  
このニオイ……」

「お前達からモ  
オナニー馬鹿女の  
エロいニオイが  
漂って来るぞ」

「今すぐ全員  
パンティを  
下ろせ！」



「全く……！  
目の前で  
友達がレイプ  
され充つてのに」

「気を引き締める  
どころか発情  
しやがって！」

「そんな  
ふしぢらな  
生徒にも  
罰が必要  
ぢなあ！」

「服を脱いで  
一人ずつ先生の  
前に来い！  
犯してやる！」







「やっぱり女は  
チンポの事しか  
考えとらんのか！」

「罰として毎日  
レイプしに来るからな！  
夜になつたらマンコ  
温めておけ！」

「ちっぶり  
オナニーして  
レイプの準備  
します……♡」

「はい……♡  
先生……♡」

「はあ♡  
はあ♡」

今宵も、まどかはお気に入りのベッドボードの飾りにまたがって、自慰行為に耽っていた。いつもの様にネグリジェの裾で声を押し殺す事も無く、寮に響くような大きな声でいやらしく鳴いていた。

「ああんっ♡ あああんっ♡ せっくすっ♡ せっくすうっ♡  
おちんぽっ♡ 先生のおちんぽっ♡ 待ちきれ無いっ♡♡♡」

娼婦の様な恥知らずの嬌声は、一つだけでは無かった。

「したいっ♡ セックスしたいっ♡ 先生早く来てっ♡♡」  
「イクっ♡ もうイっちゃうっ♡ またイっちゃうっ♡♡」  
「おしおきしてっ♡ アタシ悪い子っ♡ 悪い子なのっ♡♡」

男性教師のペニスによって、美少女達は自慰行為では得られない刺激の虜になってしまった。またあの刺激を味わう為、寮では自慰行為禁止の規則が堂々と破られるようになり、毎夜の如く誰かがレイプされ、種汁を注がれ身悶えているのだった。

「お願い先生っ♡ 今夜は私を選んでっ♡ おまんこをたっぷり潤わせてますっ♡ 先生のおちんぽ様が気持ち良くなれるように、沢山ほぐして温めてますっ♡ お願いします先生っ♡ 今夜は私を犯して、沢山汚して下さいっ♡♡」

競うようにして行われる自慰合戦の最中、廊下にガサツな足音が響く。それがまどかの寮部屋に近づくにつれ、彼女の声は大きくなり、腰の動きは一層激しくなる。そして、まどかの部屋の扉は開かれた。

「先生っ♡♡♡」  
「よおまどか、サラも元気にオナニーしてるか？ 全くけしからん娘達だ。規則を破った罰として、今日も孕ませてやるからな」  
「はいっ♡♡♡ 先生っ♡♡♡」

寮部屋の友人と一緒に、まどかは汗と愛液が滴る身体を躍らせベッドの上に飛び乗ると、尻を突き出してペニスを懇願した。固い男根を根本まで飲み込もうと、美少女達の膣がパクパクと口を開き、だらしなく涎を垂らす。

淫らな快感をねだり、まどかは切なそうに鳴き続けた。

終  
わ  
り

